

第Ⅳ部

匝瑳市の城郭と居館跡

日蓮宗の檀林(大学)

飯高城跡



所在地・匝瑳市飯高1789ほか

匝瑳市飯高地区は、北総台地を南北に貫く栗山川支流・借当川流域の肥沃な穀倉地帯の北岸に位置し、古代より人々の繁栄した生活が営まれていた。周辺の水田地帯はかつての湖沼跡で、東方の広大な樺海からの水運が当地に経済的な基盤をもたらしていたと考えられている。中世には、この権益をめぐって千葉氏一門の武士団も当地に進出して各地に城館を構え、戦乱の時代に移っていった。

鎌倉時代中期、千葉氏と同族の飯高氏が当地を所領とし南北朝期まで同氏の支配下におかれた。飯高氏が飯高城を居城にしたのかは記録がなく不明であるが、一時的に居城とした可能性もある。

戦国時代には、匝瑳北条荘の地頭であった平山刑部少輔常時が居城にしたと伝えられている。日蓮宗に帰依していた常時は天正18年(1591)、城地のすべてを寄進し、日蓮宗の檀林(学問所)として飯高寺が開かれたといわれている。

飯高城跡の規模は、南北150m、東西100mの独立丘陵を、土塁・空堀で直線的に分割した構造で、5つの曲輪からなる。最北の土塁で囲まれた所が、中心的な曲輪1で、その南側の講堂等の立ち並ぶ場所が曲輪2になる。ここから南方に3・4・5と計5つの曲輪跡が、檀林建設の工事により削

平されているが、僅かに残されている土塁・空堀によって、現在でもその跡は明らかである。

江戸時代の飯高寺は日蓮宗最高の檀林として発展し、多くの有能な僧を輩出した。盛時には5、600人の学僧が学び、寄宿舎も59棟立ち並んでいたという。また、法華宗門の総本山である身延山久遠寺の貫主は全て飯高檀林の化主けしゅ（学長）を勤めた僧が晋薫することが幕府から認められていたという。なお当寺は徳川家との関係も深く、講堂他諸施設は、家康の側室お万の方の外護を得て建立したものである。お万の方の実子、頼房・頼直は、水戸徳川家・紀伊徳川家の祖となり、その縁により参道の



飯高城跡（講堂）



飯高城跡（北側から城跡全景）